

氏名(本籍)	丹羽洋子(京都府)				
学位の種類	教育学博士				
学位記番号	博甲第706号				
学位授与年月日	平成2年3月23日				
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当				
審査研究科	心理学研究科				
学位論文題目	達成行動についての情緒-認知相互作用モデルに関する実証的研究				
主査	筑波大学教授	教育学博士	高野清純		
副査	筑波大学教授	教育学博士	杉原一昭		
副査	筑波大学助教授	教育学博士	太田信夫		
副査	筑波大学助教授		川合治男		
副査	筑波大学教授	教育学博士	井田範美		
副査	筑波大学教授	教育学博士	市村操一		

論文の要旨

(1) 本論文の構成

本論文は12章、本文382頁(実験9, 調査13), 引用文献17頁などからなっている。

(2) 本論文の目的

本論文の目的は、児童の達成行動を説明するために、情緒-認知相互作用モデル( ECIモデル)を提唱し、通常の学級における学習行動への適用とその妥当性を検証することである。

(3) ECIモデル

本論文で提唱された ECIモデルは、図1に示されるようなものである。以下、図中の①から⑥の順に、このモデルについて説明を加える。このモデルは、大きく情緒/動機づけシステムと、認知/動機づけシステムとから成り立っている。

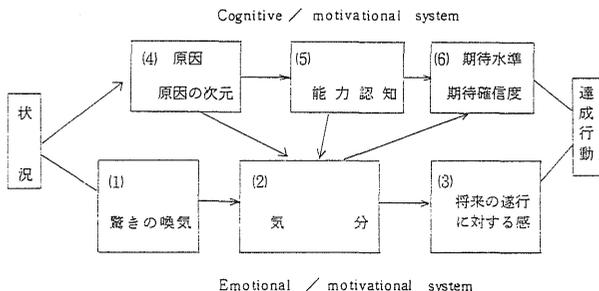


図1 達成行動の情緒-認知相互作用 (ECI) モデル

- A. 認知／動機づけシステム : 状況→原因帰属(原因の次元)→能力認知→期待水準・期待確信度→達成行動という認知的連鎖による動機づけプロセスが仮定される。状況は何らかの認知的評価の次元によって解釈される。その一つは、環境の認知であり、このモデルでは「原因の次元」が、他は自己の状態についての認知で「能力認知」としてとりあげられる。さらに、将来の遂行を動機づけるものとして「期待」がとりあげられた。本モデルでは、期待は「期待水準(成功への期待の高さ)」だけでなく、「期待確信度(成功への期待についての自信の強さ)」の2次元からなっている。
- B. 情緒／動機づけシステム : 状況→驚きの喚起→気分→将来の遂行に対する感情→達成行動という一連の情緒／動機づけプロセスが仮定される。まず、外的刺激によって、生理学的覚醒が喚起される。この覚醒状態は、ここでは「驚きの喚起」と規定される。この生理学的覚醒によって生じる主観的経験は、環境の認知的解釈の結果を反映するものであり、「気分」と定義された。この情緒の状態は、生理学的覚醒によって強度を規定される。また、気分は positive affect と negative affect から成り立っていると考えられる。この気分は、「将来の遂行に対する感情」の予測との関連から、遂行への欲求の強度を規定する。
- C. 相互作用システム : 上述の2種のシステムは相互に作用しあっていると仮定されている。認知／動機づけシステムにおける状況の認知的評価過程である、④(環境についての解釈)と⑤(自己についての解釈)は、ともに①で喚起された覚醒に対して生じる情緒の質を決定する。その結果、現在の気分②が醸成される。同様に、情緒システムの認知システムへの作用も考えられている。すなわち現在の気分②は期待⑥に影響し、期待の評価過程を変化させる。

(4) 被験児と研究年月日

茨城県内ならびに都内の7歳から17歳の児童、青年で、総計3776名(男女ほぼ同数)であった。実験ならびに調査は、昭和61年7月から昭和63年11月までの間に実施された。

(5) 方法

目的に到達するために必要なテストが作成され、情緒を醸成し、測定するための方法が考案された。

(6) 研究結果

- A. 認知／動機づけシステムの検証 : 第1章では、原因帰属と達成行動の関係について検討され、原因帰属が直接達成行動に影響するのではなく、状況の認知的評価の次元としてみなすべきであることが示唆された。第2章では、優秀児について、能力認知と実際の達成行動との関係が分析された結果、能力認知と達成行動との相関は低いことが確かめられた。第3章で、達成を直接規定する要因としての期待の役割が明らかにされた。第4章では、認知的連鎖と達成行動との関連が検討され、ECIモデルの認知／動機づけシステムは検証された。
- B. 情緒／動機づけシステムの検証 : 第5章では、驚きの喚起と達成行動との関係について、必ずしも驚きが大きいほど達成水準が高いとはいえないことが見いだされた。第6章では、気分と学級での課題にたいする耐性についての実験的検討がなされ、第7章では、達成行動における気分と将来の遂行に対する感情の役割が検討された。その結果、現在の気分は達成水準に影響し

ないが、将来の予測された感情は有意な影響を与えることが明らかにされた。

C. ECI モデルの検証 : 第8章では、原因帰属と情緒反応との関係、すなわち④→①もしくは④→②が検討された。第9章では、④→②の関係がさらに詳細に検討され、外界の認知の方略を持たない時、negative affect の生じ易いことが明らかにされた。第10章では、能力認知と気分の関連が探求され、第11章では、情緒から認知への影響が検討された。その結果、現在の正・負・ニュートラルな気分は、期待水準及び期待確信度に影響することが確かめられた。

以上の結果から、従来動機づけは内発的と外発的とに分けられていたが、本来は同じプロセスを辿るものではないかということが示唆されたということができよう。すなわち、外的報酬を得ることによって、喚起される感情過程によって、動機づけは説明できるといえるように思われる。

### 審 査 の 要 旨

本研究は、達成行動を規定する最も重要な要因と考えられてきた動機づけをとりあげ、認知的要因と情緒・感情的要因が児童の達成行動に影響するメカニズムを解明しようとした。そのために、独自の動機づけモデルを提唱し、緻密な研究の積み重ねによって、その目的に到達することを得たといえる。さらに、部分的ではあるが、実際の教室での達成行動への、そのモデルの適用を試み、ある程度の成果をおさめていることは、この研究の評価を一層高めているといえるであろう。もちろん、このモデルそのものの構成やその検証の仕方に問題がないとはいえないが、それらの点についての検討は、むしろ今後に残された問題であり、この論文の質を少しも低下させるものではない。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。